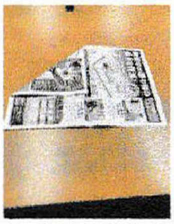
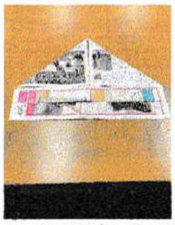
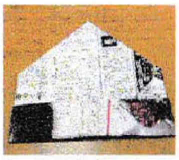

1 新聞紙を半分に折り綴じている方を上にして半分の縦線まで三角に折る


2 下の部分の上２枚を先ほど折った三角の線まで折りさらにもう一段折る

3 裏返して左右を中央線まで同じように折る

4 下の部分を半分まで折りさらにもう１回折りたたむ

5 帽子のように折りたたむ


6 三角帽子の頂点を半分の長さまで折り、折り目をつける

7 帽子のように広げて底の部分の対角線で折りたたむ

出来上がり！

新聞ゴミ箱で検索すると出てきます！ぜひお試しください！

ドラゴンへの階段　第⑳回

《エッセイ版》

佐藤　洋祐

「心技体の磨き方⑥～弟子をとって一人前」

皆様、こんにちは！今年ももう師走（しわす）。せっかくです、今回は「師」のお話しを。

「師」という漢字の起源の一説に、左側の「𠂤」は戦いに赴く隊の人々に持たせた祭肉、右側の「帀」はそれを切り分けるための刃物である、というものがあります。つまり何かを修得する過程で必ず遭遇する「できない」という混沌とした状況にあって、複雑に絡み合った様々な問題・課題を一度バラバラに切り離し、それらを順序良く解決させ「できる」という状況を再構築する導きをする、それが「師」の役割である、という理解ができます。そう、「できない」ということはたくさんの小さな「できない」要素が混ざりあって出来なくなっていますから、それらを分離、整列して、順序良く克服していければ「できる」ようになるかも知れないってことですね。かも知れない、ということは、あくまで課題を克服していくのは師の導きを得ている弟子ですから、弟子の取り組み次第ということになりますが、師がそれを上手に導けたら、よい関係ということになりますね。

実はこの時、師も大切な学びの機会を得ていることになります。

昔から、タイトルにもある「弟子をとって一人前」という言葉があります。お弟子さんや後輩ができて、何かを継続的にお教えになったことがある方はご存じかと思いますが、教える際にとても便利な「教え方」、「～メソッド」とか「教え方ガイド」のような有難い先人の遺産が、どんな習い事にもあるものです。つまり、「師」が教えに使う教材ですよね。そして「師」自身もその教材に並べられた課題を順番に克服して物事の習得に至っているので、弟子に身をもって示しながら課程を進めていくことができます。たいがいこれに則ってお弟子さんを導いてゆくことになりますが、ここで実際にお弟子さんという自分以外の他者に教える時になって初めて、それぞれの課程が持っている意義、その課程に向き合うことが学び手に何を与えてくれるのか、なぜこの過程がこの順番で並べられ、それぞれにどれだけの時間を費やすべきなのか等々、先人の残した偉大な知恵の遺産の意味について隅々まで思考をめぐらすことになるんです。自分が今よりも若き日にその課程に出会い、教わった、学んだ時は、与えられたものを無心にこなしていくだけで考えもしなかったことなんですね。そう、知らないうちに「できる」ようになっていた。それが今、まだ「できない」お弟子さん達にどんな導きを与えるべきかを考えたとき、師にとっての新たな「学び」が始まる訳です。それぞれお弟子さん達の体や性格、目標としているものは様々ですし、もちろん師である自分とも違いますから、それらに応じて彼らを導くために、様々な課題のもつ真の意味を学ぶのです。師が弟子をとって一人前になれるかは、その思いをめぐらす深み、高みにかかっていると思います。

そして「できる」は「できない」の始まりでもあります。何かを修得しその意義を知った人にとって、その先の進む道は歩む度にその足元に自然と灯がともるように明らかになり、再び新たな課題が生まれ、またそこに取り組んでいくことになります。お弟子さんはもちろん、師にとっても一生が学びの連続です。こうして考えると、学び続けている、学び続ける方法を知っている師に就かれることが、お弟子さんにとっていろいろな意味で最良かと思います。

挿絵　TAKAKO

佐藤　洋祐（サトウ　ヨウスケ）
ジャズミュージシャン。サックス奏者としてグラミー賞を2度受賞、ノミネートは4度。海外での活躍で世界的に高い評価を得た。その後2015年末千葉県に住まいを移し現在に至る。2019年よりシンガーとしても活動を開始。